

目的 家事労働の社会化、高学歴化など婦人を取りまく状況の変化は、婦人のライフ・サイクルや生活時間の変容をもたらし、就労や余暇活動の機会を増大と多様化を促している。そこで個人の選択の自由度が高い余暇活動を取りあげ、その特性を明らかにする。

方法 『婦人の生活実態と意識に関する調査報告書—婦人の社会参加と余暇活動—』愛知県総務部青少年婦人室 昭和59年3月(調査担当 久世妙子氏他)の資料分析による。

結果 外食、ショッピング、スポーツ、鑑賞・見物、遊技場、けいこごと、ボランティア・福祉、PTA・母の会、地域団体の仕事、学習会、日帰り旅行、宿泊旅行の回数について、職業別、年代別による重回帰分析では、無職、常勤、パート、家業従事、内職の如何に関わらず各項目共、年13~24回(月2回以下)の係数が0.3~0.6で最も小さい。20、30、40、50、60年代別では、鑑賞・見物、スポーツなど年4~6回と37~48回(月4回以下)の2極分化と、ショッピング、外食など年4~6回、13~24回の範囲に極大値が拡がる項目がある。勉強・学習活動、けいこごと、読書、レジャー活動、交際、くつろぎ、ラジオ、TV、の生活時間について平日と休日の職業別、年代別の因子分析では、両日共無職はくつろぎ、内職は交際、他は平日はレジャーと読書、休日はくつろぎレジャー。年代別では20、30代はくつろぎと学習、50、60代はけいこレジャー、40代はくつろぎと交際。

以上から、余暇活動の回数は全体的には、職業別では年13~24回(月2回以下)、年代別では内容により2極分化と極大値範囲の拡大がみられ、この部分の変化は全体への影響が大なることを示す。時間的には平日、休日共職業、年代を問わずくつろぎが主である。